

戦死者とともに生きる

—現代ベトナムにおける遺骨と凶事、そして収束する物語—

ショウン・キングスレイ・マラーニー

翻訳：増渕 あさ子

目次

はじめに

兵士の死と社会主義国家

戦死者とその家族

大虐殺、そして、再定位される他なる死者たち

遺骨と収束する物語

結論

はじめに

歴史家ジョージ・L・モッセが、その先駆的著作『英霊——創られた世界大戦の記憶』のなかで指摘するところによると、フランス革命(1792-1799)とナポレオンからのドイツ解放戦争(1813-1814)以後に、ある意義深い文化的変化が生じた。それは、「戦争体験の神話」とでも呼びうるものが新たに登場したことである(Mosse 1990: 9)。戦争体験の神話が構築される過程は複雑であるが、いずれにせよ、その神話に着目した考察によって、モッセはそれらの戦争に際して生じた重大な問題を明らかにしている。それらの戦争は、おおむね傭兵たちによって戦われた従来の戦争と異なり、「大義のため、国のため」という動機を抱いた志願兵によって

主として担われた(Mosse 1990: 9)。しかし、すべての戦争においてそうであるように、志願した兵士たちの多くは戦闘のなかで命を落とした。それゆえ、「彼らの犠牲を公式に認定し、正当化する必要が生じたのである」(Mosse 1990: 10)。モッセが論じるように、戦争体験の神話は、兵士たちの犠牲を正当化する重要な役割を担ったのであり、そして、そのような神話の作用は、第1次世界大戦以降になるとさらに強化されていった。「戦争共同墓地、戦争記念碑、死者を記念顕彰する式典など、有形化されたいくつもの象徴」が登場したのである(Mosse 1990: 9)。

モッセの分析は、ある危機的な現実に焦点をあてている。それはすなわち、戦争により悲劇的な死が生み出されたうえに、生き残った者が死者の存在に否応なく向き合わされるという、そういった現実のことである。モッセを始めとするいくつかの研究は、戦闘における兵士の死が国民国家の正当性に突きつける問題について考察しており、さらに、そうした問題を解決するために作り出され、援用された諸々の対処法に注目する。そこでは、各種の神話や記念顕彰のための建造物が制作された経緯や、儀礼の実

8 戦死者とともに生きる

践が刷新された事情が、明らかにされている（Baird 1992; Kapferer 1988; Kwon 2006; Malarney 2001, 2002; Tumarkin 1994 を参照）。他方で、別の角度から考察を展開する研究者もいる。彼らは、生き残った家族や親類たちが、戦争により生み出された死に対してどのように処したかを、個別の事例に即して検証している（Faust 2001; Kwon 2006; Malarney 2001, 2002; Tumarkin 1994 を参照）。これらの研究が示すように、戦争による死は、社会の異なる位置にある人々に対して、それぞれ相違した問題をもたらしている。そして、個別の事情に応じて、異なった解決策が要請されているのである。

本稿の目的は、現代ベトナムにおける、戦死者をめぐる固有の文化的、社会的力学を考察することにある。1946 年から 1990 年にかけて、ベトナムは、何百万人もの市民の命を奪う一連の戦争を経験してきた。第 1 の戦争は、フランスに対して 8 年間行われたものであり（1946-1954）、第 2 の戦争は、北のベトナム民主共和国と南のベトナム共和国や合衆国をはじめとする同盟国のあいだで行われた、長期にわたる統一戦争（1959-1975）である。中国を相手取った短い国境紛争（1979-1980）がそれに続き、さらに、クメール・ルージュ打倒後のカンボジアでも戦争が繰り広げられた（1979-1989）。これらの戦争は、何十万人ものベトナム兵の死者を出し、そして同時に、少なくとも 100 万人に及ぶ非戦闘員である市民の死をもたらした。前

述した戦争の場合と同様に、これらの戦争によって一連の問題が引き起こされた。とりわけ、兵士の死を正当化する必要が生じたという点では、19 世紀ヨーロッパにおける戦争と事情が似通っていた。だがそこでは、固有の文化的文脈に起因する問題も発生した。本稿における分析は、戦争中に命を落とした人々の、それぞれ相違する個別の死が、ベトナムにおいて文化的に分類され、意味づけられる諸相を示すを試みる。後述するように、このような戦死者の分類は、国家と民間人の双方が担い手となった。その分類の担い手が占める社会的な位置の相違によって、戦死者の存在がどのような凶事を引き起こすと認識されたかは、多様に異なってくる。しかし、個々の事情は異なったとしても、予想される凶事に対して文化的に対処する必要から、死者を物語化する試みや、各種の儀礼や葬礼の実践など、様々な解決手段が採用されたのであった。本稿では、過去数十年のベトナムにおける戦死者の処し方の複雑さと多様性を示したうえで、最終的な結論としては、それらの差異にもかかわらず、ベトナムにおいて戦争を生き延びた者たちが、ある思いを共有していると主張するだろう。それはすなわち、悲劇的に命を落とした者を安眠させるために、その死者を現在の社会秩序に統合しようとする思い、である。

兵士の死と社会主義国家

ベトナムの社会主義革命は、公式には 1945 年の 8 月に起きたとされている。しかし、1946 年の 12 月までに、かつての宗主国であったフランスが、ベトナムでの支配権を主張して兵士を送り込み、再度侵略を開始した。それ以降、1975 年 4 月 30 日にいたるまで、戦火が完全に止むことはなかった¹。戦争の勃発により、多くの人々が殺された。けれども、革命を導いたベトナム人共産主義者は、それ以前の反植民地闘争の過程において、すでに多くの支持者を失ってきたのだった。それゆえ、彼らは早い時期から、死した者たちが払った犠牲を高貴なものと位置づける取り組みに着手していた。1952 年にベトナム人共産主義者は、彼ら死者たちを識別するために「革命に殉じた者（烈士、liệt sĩ）」という文化的カテゴリーを導入している。この“liệt sĩ”という言葉は、それ以前のベトナム語にすでに存在した語彙であったが、ベトナム人共産主義者はそこに新たな意味を吹き込んだ。その言葉は、革命のために自らの命を「犠牲（hi sinh）」にした者を示すようになったのである。ブノワ・ドゥ・トレグロデは、1957 年に出版された公式文書に依拠しながら、革命に殉じた者とは、すなわち、「1925 年以降の帝国主義及び封建主義に対する闘争の過程で、戦場にて名誉ある死をとげた者」を意味すると、いみじくも指摘している。続けて彼は、革命に殉じた者とは「民

族革命という事業を防衛するための前線で、勇敢に戦い、そして倒れた者」であるとも述べている（Tréglodé 2001: 76）。しかしながら、どの人物が革命に殉じた者であるかを決めたのは、当初は党であり、後には政府であったという事実²に注意が必要である。その称号を得るうえで、年齢や性別、共産党籍の有無による制限はないにせよ、公式の調査と承認が必要とされたのである。

ベトナム人共産主義者は、革命に殉じた者の名簿を、1925 年を起点として作り始めたが、1946 年に戦争が勃発すると、その数は著しく増大していった。ベトナム人共産主義者にとって、戦死者によって引き起こされると予想された凶事は、19 世紀のヨーロッパにおけるそれと似通っていた。どちらの戦争における兵士の死も、それを生き残った者が死を無意味なものと認識する可能性を生み出し、さらに、人々の闘争への支持を失う結果を招きかねないものであった。この予想された凶事はまた、戦争への幻滅が、やがては、北ベトナム社会を変革する試みに対する幻滅を招いてしまうのではないかという、当然の危惧を生じさせもした。そうした諸々の事態を回避するために、その後数十年にわたって、兵士の死は有意義なものであるという認識を強化する方策が、次々に導入された。

最も身近な方策として繰り返行われてきたのは、外国からの侵略に抵抗した英雄として、戦死者をより広範で支配的な物語のなかに位置

¹ 本論の 1、2 節において議論されている点について、より詳細な説明は Malarney 2001, 2002 を参照のこと。

10 戦死者とともに生きる

づけることであった。ベトナムは歴史上、近隣地域と多くの戦いを繰り返してきた。そのうち最も有名なのは、北の隣国である中国とのあいだに起きた数々の衝突である。中国は、紀元前111年から紀元後938年にかけてベトナム北部を征服し、自国の領土に併合した。何世紀にもわたって、様々な人々が、このような外国からの攻撃に対して戦ったことで名声を得てきた。たとえば、紀元後40年から43年にかけて、当時支配者であった中国を打倒したのち、非業の死をとげた徴(チュン)姉妹、248年に中国に対する反乱を指揮した趙氏貞(チュウ婦人)や、1285年にモンゴルのベトナム侵略を阻止する戦略を考案した陳興道(チャン・フン・ダオ)といった人物たちである。社会主義国家は、彼らを「民族的英雄(anh hùng dân tộc)」、あるいは単に「英雄(anh hùng)」として定義している。

革命に殉じた者は、このような外国の侵略に対して戦った英雄という、より広い枠組みのなかに統合された。ヴォー・グエン・ザップ将軍は、1944年12月に、陳興道小隊と呼ばれた最初の正式な反植民地部隊を組織した軍隊長であり、1954年のディエンビエンフーの戦いにおいては、フランスの撤退を導く歴史的な勝利を勝ち取った。その彼が以下のように述べている。

「闘争のために党、軍隊、人民が結束するという今日の思想は、伝統的な軍事思想と切り離すことができない。歴史上、抵抗や解放を求めて勝利を収めたすべての戦争は、徴姉妹、李貴

(リ・ボン)、趙光復(チュウ・クアン・フック)、黎利(レ・ロイ)、阮薦(グエン・チャイ)といった人物によって導かれたどの戦いも、外国勢力が強いる封建的支配からの脱却を目指して継起した攻勢という、共通の性質を持っていた」

(Vietnam, Institute of Philosophy 1973: 269)。ここでは、外国の侵略に対して戦い、そして闘争のなかで死すことは、脈々と続く気高い愛国的闘争に連なる行為とみなされている。あるいは、国家は、人々の闘争と犠牲が高貴な行為であると主張するために、独自の修辭的表現を多用しもした。たとえば、外国の攻撃に対する抵抗は、「大いなる道義」もしくは「正しい道義」と訳しうる“chính nghĩa”という語で表現されたが、そのことで、その抵抗が道義的な性質を帯びることが強調された。戦争それ自体にも意味のある名称が与えられた。フランスに対する戦争は、不当な抑圧者に対する反乱という意味を持つ“khởi nghĩa”という言葉で表現され、アメリカに対する戦争は「抗米救国戦争(Chiến Tranh Chống Mỹ Cứu Nước)」と命名された。戦争は同時に、神聖な行為としても描き出されている。共産党第1書記のレ・ズアンは1968年に、「国を救うことは、人民の神聖なる義務(nghĩa vụ thiêng liêng)である。我々は、戦い、勝利しなければならぬ。我々の独立と自由を維持するために、健康と幸福を確たるものとするために、そして、豊かで美しいベトナムを築くために」と宣言している(Vietnam, Institute of Philosophy

1973:275)。彼らはまた、戦死を「名誉あるもの (vinh dự)」と表現し、革命に殉じた者の死を語る際に “công hiến” という動詞を用いた。この動詞は、偉大な存在に対して何かを献じるという意味合いを持っている。ここでは、文脈上、兵士がベトナム民族を守り維持するために、彼／彼女の命を捧げるという意味になる。さらに国家は、革命に殉じた者の勇氣と犠牲を公共の場で賛美した。レ・ズアンは、1968年に次のように述べている。「自ら進んで犠牲となる高潔さがないければ、真の革命家とはいえない。革命の理想を実現しようとしながら自己の犠牲を恐れるならば、空虚な言葉を述べたてにすぎなくなる」(Vietnam, Institute of Philosophy 1973:275)。こういった公的な発言が、殉死した者の美德を高め、社会生活におけるその途方もない名声を保障したのである。

これらの文化的な改革は重要であったが、戦争による死を高貴なものとして位置づけるために広く行われた取り組みのほんの一部にすぎない。マーク・フィリップ・ブラッドレーが言及しているように、そうした取り組みは、小説、詩、絵画といった多様なメディアを活用して展開されており、さらに後には、記念館のような有形の建造物が建設されるまでになった (Bradley 2001 を参照)。国家はまた、人々に対してより直接訴えかける場として、記念顕彰のための空間や儀礼を新たに作り出し、それらの場においては、戦争による死の高貴さを保つ演出がなさ

れた。こうした一連の取り組みのなかで、最初期に行われたもののひとつは、1947年に、7月27日を「傷病兵と革命に殉じた者の日 (傷病兵・烈士の日、Ngày Thương Binh Liệt Sĩ)」として定めたことである。この日には、地方政府から中央政府にいたるまでの政府関係者が式典をとり行い、負傷し障害を負った退役軍人の貢献が認定されるのである。長年、この式典は不定期に行われていたが、1967年以降に年1回の行事となった (Pike 1986:318)。

1950年代に革命政府は、「革命に殉じた者の共同墓地 (烈士共同墓地、nghĩa trang liệt sĩ)」の建設を広める政策を推進した。その建設によって、革命により打ち立てられる新たな社会空間のなかに、戦死者の居場所を物質的に確保することが目指されたのである。墓地には様々な形式が見られ、既存の墓地のなかに、革命に殉じた者を埋葬する区画が増設される場合もあれば、革命に殉じた者を埋葬する専用の墓地が、新たに建設される場合もあった。しかしながら、革命に殉じた者の遺体が故郷の村に戻されない限りは、そうした墓地を建設するのは難しかった。そして、実際には多くの場合に遺体が消失してしまっており、それゆえ、専用墓地が設けられなかった村々もあった。他方で、遺体の有無とは無関係に、ほとんどすべての村々において、革命に殉じた者のための記念碑が建立された。この記念碑は、一般的には、「追想の碑 (想念台、đài tưởng niệm)」や「革命に殉じた者の碑 (烈士

12 戦死者とともに生きる

台、dài liệt sĩ)」と呼ばれている。記念碑の建築様式は様々であるが、そこにはたいてい、「祖国は功績を記す (Tổ Quốc Ghi Công)」や「革命に殉じた者への恩義を永遠に忘れない (Đời Đời Nhớ Ôn Người Liệt Sĩ)」といった共通の標語が記されている。これらの標語は、兵士の犠牲に対する公式の謝意を人々に示すうえで重要であるが、国家のもう1つの意図は、墓地や記念顕彰の碑を新たに作り、それらを人々の生活のなかに溶け込ませることで、革命に殉じた者の高貴さとその大切さを、より広く知らしめることにあった。たとえば、ニンビン省のある公人は、「すべての者が、村や都市に存在する革命に殉じた者の墓地を守り、維持する責任を負う。人々はそこで、革命に功 (công đức) を残して殉死した英雄を思い起こし、彼らへの恩義をあらためて実感するだろう」と述べている (Ninh Bình, Cultural Service 1968: 64)。あるいは、同様の規定を設けて、その土地の若者を墓地へと連れて行き、墓地を守ることや、殉死者の犠牲に感謝することを教育する村もある。また、ナムハー省の公人は、別のユニークな慣例を発案した。結婚式で誓いを立てた男女が、その式の最後に戦死者の墓地を訪れて、ブーケを記念碑に捧げるのである。その行いにより、2人は革命に殉じた者に感謝の意を表明するのだった (Vietnam, Ministry of Culture 1979: 24)。現在のベトナム社会においては、革命に殉じた者の墓地や記念顕彰の碑は、ほとんどすべての村々で目にするこ

とができるほど普及しているが、そのうちの最大規模のものは、革命に殉じた者のためのチュオンソン国立共同墓地 (チュオンソン国家烈士共同墓地、Nghĩa Trang Liệt Sĩ Quốc Gia Trường Sơn) である。この墓地はベトナム中部のクアンチ省にあり、現在ではそこに、ベトナムのあらゆる省から運び込まれた、1万に及ぶ戦死者の遺体が葬られている。

記念顕彰のための建造物や空間は、戦死者の名声と高貴さを人々に伝えるうえで、とても大きな役割を担っている。国家にとって、戦場で戦い死ぬことを無意味とする考えに対処することは、間違いなく重要なのである。その一方で、国家は、戦死者の遺族がそのような考えを抱かぬように、慎重に配慮する必要にも迫られた。たとえば、先述の傷病兵と革命に殉じた者の日に関連した式典は、戦争による死の高貴さが再確認される場であっただけではない。それは同時に、国家が彼らの犠牲を公認し、遺族への支援を約束することを示す場なのでもあった。しかし、遺族に対して講じられた措置のうちで最も重要な意味を持ったのは、抗米戦争の最中に発案された、「革命に殉じた者への公式の追悼式 (lễ truy điệu)」と訳すことのできる式典である。ここでは、ハノイの南方に位置するティンリエット社 (村) で一般的にとり行われたその式典の様子を描写してみよう。

その公式の追悼式がとり行われるに先立って、村の人民委員会のもとに1通の文書が届けられ

る。その文書は、村民のうちのだれかが死に、革命に殉じた者となったと伝えるものである。この伝達書が届くと、人民委員会に所属し、村内の様々な社会福祉業務の責任者である社会政策担当官 (phó ban chính sách xã) が、まずはその知らせを、友人や親類を通じて間接的に遺族に伝える。そして後日、この担当官が直接に遺族のもとを訪れて、その知らせをあらためて正式に伝達するのであった。この訪問に際して、担当官は遺族に弔意を伝え、彼らと話し合いながら、式典をとり行う日時を定めた。

通常の葬儀と同様に、公式の追悼式は遺族の家でとり行われた。しかし、旧来の慣習と違い、喪主を務めるのは遺族ではなく、社会政策担当官であった。ティンリエット社での追悼式は、通常午後2時に始まり1時間続き、その場には、村の人民委員会の委員長や共産党書記を始めとして、村の行政に携わる多くの公人が参列した。式典を取り仕切る担当官は、まずは遺族に花束を捧げ、次いでそれを犠牲者の祭壇に献じる。続いて彼は、1 分間の黙祷を経て、犠牲者への弔辞を述べる。その弔辞においては、兵士が自らの命を犠牲 (hi sinh) にしたことが強調され、その犠牲が称えられる。社会政策担当官によって読み上げられる言葉は、おおよそ文言が定まっており、その一節を記すと次のようになる。

部隊の幹部及び兵士は、この国の独立と自由のために戦い抜き、命を捧げた (công hiến)

戦友の死を永遠に悼み、その犠牲を誇りに思うであろう。戦う気概と敵に打ち勝つ力を高めることを誓った彼は、抗米救国戦争のなかで、敵を打倒することに自らの精神力と体力のすべてを注いだ。彼は、党、国家、人民により与えられた任務を全うしたのである。

この弔辞が終わりにさしかかるところに、社会政策担当官は、参列した多くの公人たちが、遺族に対して敬意を表明し、「悲しみを分かち合う (chia buồn)」ことを望んでいると述べる。このベトナム語の言葉は、通常の葬儀でも使用されるものだという点で意義深い。つまり、ここでは、公人たちが職務として参列しているよそよそしさを、村民たちが日々用いる慣用表現を使用することによって、紛らわせているのである。弔辞を述べた社会政策担当官は、続けて、政府によって発行された「死亡通知書 (giấy báo tử)」と、およそ 150 ドルに相当する弔慰金、そして兵士の名前と「祖国は功績を記す」という文言が大きな赤い字で記された証明書を遺族に手渡す。現在でも、革命に殉じた者の家族の家に足を運ぶと、その家の壁に殉死証明書が飾られているのに出会うことがある。一般的に、公式の追悼式は遺族に好意的に受け取られ、感謝されているようである。

ここまで見てきたように、儀礼の刷新がなされたのは、戦争による死を高貴なものとして認め、兵士の犠牲を正当化するためであった。

14 戦死者とともに生きる

そして、同様の目的から国家が導入した、別のある重要な措置がある。それは、革命に殉じた者の遺族を支援するための特別政策である。ある者が入隊し兵士となると、その者の家族は「政策家族 (gia đình chính sách)」として認定される。このような家族は、抗米戦争中には、通常よりも多めの食料配給を得るなど、特別な生活支援を受けていた。兵士が死に、革命に殉じた者となった場合にも、遺族は政策家族という認定を保持し続けた。もちろん彼らは、「革命に殉じた者の家族 (gia đình liệt sĩ)」として新たに認定されもした。そうした二重の認定により、彼ら遺族たちは、医療や教育、就業機会、共産党籍の獲得などに関して、特別な優遇を受け続けたのである。さらに彼らには、その生活の必要に応じて、相応の手当が毎月支給された。こうした政策がもたらした結果について、ハノイ近隣のティンリエット社の元公人は、以下のように証言している。「彼らは何かにつけて楽ができた」。1990年代に入ると、政府はこれらの政策を拡充し、戦争で複数の子供を喪った母親を称える「英雄的ベトナムの母 (Bà Mẹ Anh Hùng Việt Nam)」というカテゴリーを新たに創設した。こうした一連の政策は、概して、無意味な死ととられかねない戦場での死に、高貴さという意味を付与する役割を果たしたのである。

戦死者とその家族

社会主義国家によって発案された様々な実践

や観念が、戦争への支持を確保し、多くの北ベトナム人が感じたであろう戦闘による死の無意味さを埋め合わせるうえで、大きな成功を収めたことは確かである。実際のところ、戦争のための取り組みを、正当で、高貴なものにとらえる考え方は、現在の北ベトナム社会においてもいまだに広く受け入れられている。しかしながら、そのような成功にもかかわらず、戦死者に対する公式の追悼式や、理念を強調した国家の諸政策には、ある重大な欠陥がはらまれており、その欠陥に対して、遺族ごとに異なった反応が見受けられる。そうした事例を検証するために、ここでは、ベトナムにおける戦死者の分類の多様な側面に着目し、また、戦死者がいかなる凶事を引き起こすと認識されているかを明らかにしたい。

20世紀の社会主義革命は、神や亡霊といった超自然的な存在を否定し、公式には無神論の方針を掲げてきた。ベトナム革命もその例にもれず、超自然的な存在を信じ、それが人間の生活に大きな影響を及ぼすとする考えは、初期の頃から否定されてきた。これには、2つの重要な理由がある。最も単純な理由としては、政府関係者たちが、ある特定の見解を抱いていたことを指摘できる。すなわち、彼らは、超自然的な世界に関する諸観念を「迷信異端 (mê tín dị đoan)」と総称し、それを信じることは「後進性 (lạc hậu)」や「封建性 (phong kiến)」を象徴すると考えたのである。革命政策の重点は、むしろ

ん、新しい政治や経済の体制を創出するという重要な変革の任務に置かれていたが、他方で政府は、「進歩的 (tiến bộ)」な、新しい「社会主義の文化 (văn hóa xã hội chủ nghĩa)」の創出を目指してもいた。その文化の創出によってこそ、ベトナムが輝かしい未来へと導かれると考えられたのである。そのような事情から、後進的で封建的な考え方は、新しいベトナムを創出するうえで妨げとなり、それゆえ排除する必要があると判断された。第2に指摘できるのは、国家がそうした考えの危険性を認識していたことである。つまり、超自然的な世界を信じる考え、より詳しくは、超自然的な存在が人間生活に干渉する能力を持つとする考え方は、人々に具体的な凶事をもたらすと認識されていたのである。その際に、まず想定されていたのは、人々の身体がさらされる危険である。革命以前のベトナムでは、怒れる亡霊のような超自然的な存在によって、病に代表される各種の不幸が人々にもたらされると広く信じられてきた。伝えられる話によると、ベトナム人のなかには、適切な医学的治療を受ける代わりに霊能者のもとを訪れて、病気を治す儀礼を受ける者もいた。そのなかには、当然予想されるように、悲惨な結末を迎えた場合もあったという (Malamey 2002: 94-95 を参照)。さらに、超自然的な存在を信じる者が運命論的で受動的な姿勢に陥る危険性が想定された。というのも、政府関係者たちは、超自然的な存在が人間の生活に影響を及ぼすと

考える者は、彼ら自身が世界を作り変え新しい社会を築く力を持つ事実には気づきえないと考えたのである。ニンビン省文化部が1968年に作成した文書には、こうした考え方が典型的に表現されている。「大衆がいまだに、天国や亡霊、そして運命の存在を信じるならば、自然の変化や古い社会が残した負の遺産を前にして、彼らは無力と化してしまう。人民は、彼ら自身に対して、そして社会に対して、さらに彼らを取り巻く世界に対して、完全なる支配者となることはできないだろう」(Ninh Binh, Cultural Service 1968:6)。社会主義国家の公人たちは、それゆえ、社会主義のベトナムを新たに築く担い手となるよう人々を変えるべく、彼らに「科学的精神 (tinh thần khoa học)」を普及しようと試みたのであった。

革命政府が無神論の方針を掲げたことは、革命に殉じた者を記念顕彰する儀礼の性質にも、重要な影響を及ぼした。国家は、人間の魂のような、経験的に立証できないものの存在を一切認めなかったため、それがとり行う諸々の儀礼は、完全に非宗教的な性質のものとならざるをえなかった。もちろん、参加者たちは、そうした儀礼を有意義なものと感じたが、それは、それらの場で示される感謝の意ゆえであった。そして、そうした儀礼の目的は、あくまで、死者を記念顕彰することに限定されていたのである。

公式の追悼式に関しても、非宗教的な性質のものであった。そして、その性質は、死した者

16 戦死者とともに生きる

たちが生きる者にもたらす苦難や凶事を恐れる参加者にとっては、途方もない欠陥として受け止められたのである。ベトナムの民間信仰によれば、人間の身体は3つの主要な要素から構成されている。第1の要素は、身体を物理的に構成し、呼吸を行い、生命を維持する生物学的な器官である。この生物学的な器官には、女性なら9つ、男性なら7つの「精魄（via）」が伴われ、さらに「靈魂（linh hồn）」が付随している。死が訪れると、身体の物理的器官は機能を停止させ、「精魄」も同時に存在しなくなる。しかし、「靈魂」は依然として存在し続け、生きていたときと変わることなく、意識や感覚、そして感情を有している。ベトナム人が広く信じるところによると、人が死を迎えると、その靈魂は身体から離脱し、その者が死んだ場所にたたずむ。このときの靈魂は非常に傷つきやすく、生きている者の支えを必要としている。民間信仰に従うなら、靈魂が永遠の平安を得るためには、生者の世界から旅立ち、「あの世（thế giới khác）」として知られる世界へとたどり着かななくてはならない。「あの世」は生者の世界とよく似ており、死者はそこで飲み食いし、衣服を身につけ、お金を使い、家を持つ。さらに彼らは、車を運転したり、テレビを見たり、カラオケに興じたりもする。しかし、ここで注意すべきなのは、靈魂がひとたび「あの世」へ到達すると、そこで生活に必要な物のすべては、生きる者によって与えられない限り得ることができない、

ということである。それゆえ、葬礼の場においては、通常、食物やお金、衣服といった、死者の靈魂が必要とする物を、彼らのもとに送り届ける営みがなされる。供された食物は、焚かれたお香の煙にのって死者のもとに届けられる。お金や衣服であれば、それらをかたどった紙の供物（hàng mã）が燃やされて、その煙により送り出される。これらの品々を与えることは、「あの世」にいる靈魂に対して、幸せな生活を保障することを意味する。逆に、それらが与えられない場合には、靈魂は不満や怒りを抱いてしまう。

靈魂が「あの世」にたどり着くためには、残された人々が葬儀を適切にとり行う必要がある。生きる者は、適切な葬儀を介してはじめて、靈魂を導き「あの世」へと送り届けることができるのである。さらに、靈魂が「あの世」に到達した後も、生きる者は靈魂の世話を継続し、彼らが満ち足りた平安な生活を送れるように気を配る。しかしながら、無事に靈魂を送ることは必ずしも容易ではなく、そのためにいくつかの条件が満たされる必要がある。たとえば、家のなかのようなよく知った場所で、比較的穏やかな死を迎えた者の靈魂は、自らの死という事実になれほど大きなショックを受けず、恐怖にとらわれてどこかに逃げ去ったりはしない。ベトナムの人々はこのような死を「良い死」であるとする。逆に、暴力によりもたらされた死や、突然の事故死、故郷から遠く離れた場所で訪れ

た死の場合には、そうした死を迎えた霊魂は「悪い死」を経験したと理解される。そのような場合に、霊魂はショックのあまりにいずこかへと逃げ出してしまう、遺族がその霊魂を連れ戻し、「あの世」へと送る葬儀を行いたくとも、なかなかそうはできなくなる。もう1つ重要な条件として指摘できるのは、遺族は葬儀を行うために、遺体の所在を知る必要がある、ということである。ベトナムの人々にとっては、火葬より土葬が好ましく、遺体が手元に残されていることが望ましい。もっとも、遺体が手元になくとも、その所在が分かりさえすれば、葬儀を行うことはできる。ただし、その場合の葬儀は、通常の葬儀に比べ、大幅に簡素化されたものとなる。いずれにせよ、上記のような場合には、遺族は霊魂を「あの世」へと送る営みに着手できる。しかし、死者の身体が失われてしまっていると、霊魂はこの世に呪縛され、決して「あの世」へ行き着くことができない。このような霊魂は「亡霊 (con ma)」に変じると、文化的に信じられている。この亡霊はいくつかの重要な特徴を持つ。悪い死を経て亡霊になった彼らは、自らが予期せぬ不快な死に方をしたことに對して、怒りを抱いているとされる。彼らの怒りはさらに、彼らが生者の世界に閉じ込められているため、その世話をしてくれる子孫がいないという事実によって、より一層強められる。彼らは、自分が必要とするものを自身の手で取り揃えねばならず、そのため、「あの世」に住まう他

の霊魂に対して行われる先祖供養の儀礼に侵入して、そこから物を盗んだり、人間が自分たちのために保管している物を、それが何であれ、くすねてしまう。さらに、亡霊はしばしば、生きる者に対してその怒りを直接ぶつけ、彼らに病や不幸をもたらさえる。亡霊は惨めであり、生きる者の支えを得る日まで、決して平安が訪れることのない運命にある。

戦争による死が家族にもたらすと信じられている凶事は、ここに明白となる。何万人もの若い、主として男性の兵士たちが、故郷から何百マイルも離れた場所で、暴力的な死を迎えたのである。さらに、北ベトナムの人民軍隊が備える輸送能力の低さゆえに、死んだ場所に葬られた者や、完全に遺体が喪失した者が、多数に及んだ。このため、残された者たちには、戦争による死によって、恐ろしい事態が引き起こされると予想された。彼らは、愛する者の死に對して適切に処する機会を得られずに、その者を亡霊に変じさせてしまうことを恐れたのである。しかし、すでに先にふれたように、公式の追悼式は、愛する者を戦闘で失った遺族が悲しみを抱き動揺する現実に對して、正面から取り組んだものではなかった。戦死者たちは、決して非宗教的な存在ではなく、支えを必要とする生ける霊魂であるにもかかわらず。

これらの苦難に對する遺族の対応の仕方は多様である。後に詳述するように、戦争による死と遺体の喪失を伝えられた遺族が、遺体を探し

18 戦死者とともに生きる

出そうと試みる場合もあった。その探索は何十年にも及んだが、彼らは、残された家族の役割を果たしたいと願い、遺体を埋葬して死者に平安をもたらそうとしたのである。また、いくつかの村々、たとえばハノイ南方のティンリエット社などにおいては、故郷から離れた場所における死の問題に対処するために新しい儀礼が考案された。抗米戦争の最中に、「死者を追想する」儀式（「死念式 lễ từ niệm」または「想念式 lễ tưởng niệm」）が新たに作り出されたのである。この儀式に関して重要なのは、それが公式の追悼式への批判や対抗として認識されてはおらず、むしろ、その欠点を補い、異なった問題に対処することを意図したものと理解されている点である。

死者を追想する儀式は、たいてい、通常の葬儀と同様に遺族の家でとり行われる。通常の葬儀が死の直後から準備されるのと異なり、死者を追想する儀式は、兵士が殺されたという知らせが届いてから数日後に行われた。また、通常の葬儀の場合には、多くの参列者が招かれて、複雑な儀礼が重ねられ、宴の席が用意されるのに対して、死者を追想する儀式は簡素であって、友人や近い親類などのごく親しい者だけが参列し、儀礼も簡略化されており、宴席が設けられることもなかった。この儀式は、遺族が家のなかに設置した祭壇の前でとり行われる。用意される祭壇は、通常の葬儀で使われるものとほぼ同じであり、そのうえには、死者の遺影が安置され、さらに、花やろうそく、香炉が並べられ

た。祭壇と香炉の存在は、死者の霊魂の怒りを鎮め、「あの世」における平安を彼らに保障するという、儀式の究極的な目的と結びついていた。祭壇の前に一同が集うと、死者の父方の年長者である男性、通常は伯父や大伯父が、死者の魂を招き入れる短い儀礼を行った。儀礼が終わり、霊魂がその場に呼び寄せられると、一族の他の者たちはおじぎをして、線香を手に死者への敬意を表し、霊魂に対して祈り（khấn）を捧げる。この祈りは、霊魂が「あの世」において平安を得るのを助ける役割を果たす。祈りが終わると、線香を香炉に入れる手順となる。これに次いで行われるのは、霊魂に品物を供する（cúng）儀式であり、このときに遺族の手により、死者が「あの世」で必要とする品々が用意された。前述したように、死者の霊魂を世話することは、残された者の責務なのである。そうして儀礼は進展し、遺族のうちの年少者が祈祷を行い、供された品々を死者が受け取るよう促す場面を迎える。戦死者に関する国家の非宗教的な認識と、霊魂は不滅であるとする遺族の考え方の乖離は、こうした一連の儀礼において最も顕著となる。迷信異端の排除を目指す革命政策では、「祈祷師（thầy cúng）」に死者のための儀式を依頼する行為や、先に紹介した紙の供物（hàng mã）を燃やす行為は、固く禁じられている。それにもかかわらず、死者を追想する儀式においては、多くの家族がいまだに、祈祷師の助けを求め、「あの世」の死者のために、金や衣服をかたどった紙

の供物を燃やしている。そして、一連の儀礼の締めくくりに、参列者は寄り集まって、家のなかで小さな食事の席についた。

死者を追想する儀式は、遺体が存在する通常の葬儀の代わりにとり行われ、そこでは、遺族の手によって、彼らの愛する者の靈魂を「あの世」へと送り届け、そこでの生活を保障する営みがなされた。それは、通常の葬儀のように村人が多数参列して行われる儀式ではないが、愛する者の靈魂を「あの世」へ送り届け、その者に平安をもたらすという目的は同じである。しかしながら、すでに明らかなように、この儀式における「革命に殉じた者」に対する考え方は、公式の追悼式における場合の認識とは大きく異なっていた。後者は、本質的に非宗教的な性格を備えており、そこでは死者はただ記憶のなかにもみ存在するのであった。一方、革命に殉じた者の遺族にとっては、彼らの愛する者の靈魂はいまだに生き続ける存在であり、彼らの支えを求めている。もっとも、遺族たちが公式の追悼式に感謝しているのは事実であり、それゆえ、死者を追想する儀式において、人々の抵抗や批判が表現されていると理解されてはならない。しかし、公式の追悼式は、その根本的な性格からして、革命に殉じた者の遺族が直面する痛ましい現実に対処する手立てにはなりえなかった。そうして、ティンリエット社のような様々な場所で、戦争による死がもたらす苦痛や困難に対処するための方策が、独自に考案されたのであ

る。

大虐殺、そして、再定位される他なる死者たち

革命に殉じた者は、戦争で死んだ人々のうちの、ほんの一握りの存在にすぎない。しかも、前述したように、革命に殉じた者として認定されるためには、戦闘にかかわって命を落としたという事実が公式に承認される必要があった。他方で、兵士たちのなかには、その他の原因で亡くなった者も多数いる。ある者は病に倒れ、別のある者は事故死した。さらに、動物に襲われるなどの予期せぬ出来事に見舞われて命を落とした者もいた。このような死者たちは「戦死者 (tử sĩ)」とみなされたが、彼らが革命に殉じた者と認定されることはなかった。また、軍隊の兵士たち以外にも、多くの非戦闘員が殺されているが、その者たちは「戦争犠牲者 (nạn nhân chiến tranh)」と呼ばれている。北ベトナムにおいて、それら戦争犠牲者の多くはアメリカの爆撃によって殺された者たちであった。それらの爆撃のなかには、狙い通りの空爆もあれば、もちろん誤爆もあった。そして、これらの死者たちのうち最もよく知られているのは、1972年12月26日の夜に、ハノイ市の空襲のなかで殺された者たちである。この夜、アメリカのB52戦略爆撃機が、同市のカムティエン通りからその南にかけての一带に爆弾を投下した。この一带は壊滅的な状態となり、283人の市民が命を落とした (Nguyễn Huy Phúc and Trần Huy Bá 1979:

245)。この空襲は抗米戦争における最大の悲劇の1つとして認識されており、現在では、その犠牲者を弔い、想起する記念碑が、カムティエン通りに建てられている。彼らや、彼ら同様の死を迎えた北ベトナムの人々は、アメリカによる空爆の無垢な犠牲者なのであったが、そうした彼らの死は、社会主義国家が喧伝する、戦争による死についての支配的な物語のなかに、易々と統合されてしまった。つまり、彼らもまた、アメリカという敵を打倒する広義の闘争においてその命を捧げた者と、位置づけられたのである。

北ベトナムの市民の多くが、戦争の無垢な犠牲者となった。しかし、ベトナムの南部や中部、わけても中部においては、相対的により多くの非戦闘員が殺されていることに注意が必要である。研究者のなかには、抗米戦争中に100万人以上の市民がベトナムの南部や中部で殺されたと推計する者もいる。そして、彼らの死が惹起する困難や凶事は、人類学者であるヘオニク・クウォン（Heonik Kwon、権憲益）が指摘するように、革命に殉じた者の場合や、北ベトナムに住む市民が殺された場合のそれとは、大きく性質が異なった。さらに、そうした事情であるがゆえに、人々の対応もまた、独特なものとなったのである（Kwon 2006 を参照）。

ベトナムの南部や中部における非戦闘員の死について語るに先立って、彼ら戦争の犠牲者たちが、大きく2つのグループに分類されること

を、まずは指摘しておこう。第1のグループに属するのは、北部の人々と同様に、軍の作戦行動に偶然巻き込まれて殺された者たちである。そのなかでも典型的なのは、誤った爆撃や砲撃、そして銃撃による死者である。他方、第2のグループに分類されるのは、意図的に行われた大虐殺のなかで命を落とした者たちである。クウォンの述べるところによると、1966年以降に、非常に多くの市民が意図的な殺戮の対象とされており、特に、韓国の海兵隊がクアンガイ省で展開した軍事作戦による死者は、相当な数に及んだ（Kwon 2006: 43）。そうしたなか、1968年の初頭には、2つの最も悪名高い大虐殺事件が起きている。同年2月24日には、クアンナム省ハーミー村で、韓国の海兵隊により135人の市民が惨殺された。さらに、3月16日には、クアンガイ省ミーライ村において、アメリカ陸軍兵士たちがおよそ500人の市民を殺害した。

そうした大虐殺の犠牲者たちは、戦争の犠牲者となった者であるにもかかわらず、いくつかの特徴が見られたために、社会的にも文化的にも周縁的な境域に追いやられ、その存在をほとんど認知されないできた。第1に指摘できる特徴は、犠牲者の大多数が完全な非戦闘員だったことである。そうした事情から、大義のために自らの命を犠牲にした者という分類に、彼らを位置づけるのは難しかった。実際、ハーミー村で虐殺された135人のうち、戦闘可能な年齢にあった男性はたったの3人にすぎず、他の犠牲者

たちはみな、女性か子供、あるいは老人などであった (Kwon 2006: 45)。このような状況は、ミーライ村やその他の場所においても同様であった。第2に、ベトナム南部及び中部においては、住民たちの政治的忠誠心が複雑に入り組んでいて曖昧だったために、そこで展開される戦闘が混沌としていたことを指摘できる。抗仏戦争と抗米戦争は、軍服をまとった軍人たちが戦場で対峙する通常の戦争とは異なり、通常の戦争とゲリラ戦が合わさったような性質を持っていた。抗米戦争中には、ほとんどの地上戦が、ベトナムの中部や南部を舞台として繰り広げられた。そこでは、ベトナム共和国軍 (Army of the Republic of Vietnam, 以下 ARVN) や、アメリカ合衆国、韓国を始めとする連合軍の兵士たちが、ベトナム人民軍隊 (People's Army of Vietnam, 以下 PAVN—北ベトナムの軍隊) に対して通常の戦争を遂行した。と同時に、彼らは、ベトコン (Viet Cong, VC) と一般的に呼ばれる、ハノイ政府と連合したゲリラである民族解放戦線 (National Liberation Front, 以下 NLF) を相手取り、ゲリラ戦を戦ったのでもあった。その NLF のメンバーはといえば、通常、地方の村々から選出された者であったため、地元の支持を得ていたが、その彼らの活動は、表向きは敵の支配下である地域において展開されており、それゆえ、多くの場合に作戦は秘密裏に進められた。結果として、このような地域の村々では、サイゴン政府の支持者と NLF の支持者が入り混じ

る状況が生まれた。さらに、表立って NLF を支持する者はいなかったために、また、多くの人々の忠誠心が、生き延びるためにいずれの側に就くべきかという判断に左右されたために、実際のところの人々の忠誠心は、不分明にならざるをえなかった。大虐殺は、そのような状況下で起きたのである。犠牲者たちが生きていたときの忠誠心を判別できないなか、彼らの名誉を公式に認めてしまうと、敵の死者を賞賛することにもなりかねないため、その認定が躊躇された。そして、戦争が終わると状況はさらに変化する。戦いに勝利した北ベトナムは、戦争の複雑で込み入った側面を省みることなく、輝かしい未来へと民族を導くことを望んだのである。当然のことながら、大虐殺の犠牲者たちに対する公的な配慮は、一切なされなかった (Kwon 2006: 66)。

大虐殺の犠牲者たちは、そうした特徴を抱えていたために、1975 年以降になると、その存在を周縁化され、無視されるようになった。クウォンが指摘するように、戦いに勝利した政府は、確かに死者に対する関心を抱いていたが、その関心はもっぱら、革命に殉じた者の遺体を探し出し、埋葬する取り組みに向けられたのである (同様の取り組みは、ベトナム北部でも行われた)。その取り組みは人々を団結させる重要な手段とみなされ、実際に政府は、遺体の搜索を、クウォンの的確な表現を援用するなら「聖なる任務」として位置づけて、それを住民に奨励した (Kwon 2006: 66)。さらに、これに並行して、

22 戦死者とともに生きる

革命に殉じた者の墓地が村々の中心地に建設されている。クウォンによると、「倒れた英雄たちの遺体や、それを埋葬する戦争墓地は、外国の勢力に対して一体になり戦ったという国家の記憶を、顕著に表現する場となった」。クウォンは続けて次のようにも述べている。「死した英雄たちの遺体が、戦後の生活が送られる村の中心に配置され、市民たちは彼らの記憶を保つように促された。そうした実践は、戦後に展開された身体政治学の中心的な要素を成している」(Kwon 2006: 66)。

革命に殉じた者の遺体が慎重な配慮を受けたのとは異なり、大虐殺による犠牲者の遺体は否定的な扱いをされている。たとえば、ハーミー村の場合がそうである。そこでは、大虐殺の犠牲者たちが葬られた際に、その墓は地表近くの浅い位置にあった。しかし、1975年の終戦を迎えると、政府が経済発展を重視するようになり、そうしたなかで、耕作地を開拓するという名目で、彼らの遺体が不注意にも掘り返されてしまった。そのとき、遺体の身元を確認する試みは基本的に行われなかった。クウォンの説明するところでは、地元の村人によると、開拓を志願してダナン市からやってきた者たちは、「残された弾薬や地雷を耕作地から撤去する作業中に遺骨が掘り返されたときに、その遺骨に対して何の弔意も示そうとしなかった」という(Kwon 2006: 66)。さらに、そのような遺骨は再び埋葬されたが、墓地の場所は村の中心地ではなく、

その外れであった。残された親類にとっては、それは「不適切な墓地」と感じられた(Kwon 2006: 65)。

こうした一連の出来事が遺族にもたらした苦しみは、計り知れない。クウォンは以下のように述べている。「それは慌ただしく、十把一絡げに行なわれたのである。そこでは、伝統的な儀礼がとり行われるはずもなかった。ハーミー村の人々にすれば、そのように行なわれた犠牲者の再埋葬は、不適切なものであり、残された者に大きな苦痛と恥辱を感じさせるだけだった」

(Kwon 2006: 50)。残された者にとっては、適切に処されていない死者は、安らかに眠ることができないでいると思われたのである。その結果、1990年代の初頭に政治的に自由な空気が広がり始めると、大虐殺の犠牲者の扱いに起因する諸問題を解決するために、伝統的な方法が活用されたり、新たな方法が開発されたりし始めた。採用された方法は実に様々であり、そのすべての事例をここで詳述することはできないが、その一端を簡単に紹介すると、遺骨を注意深く掘り起こし、身元を判明させ、家族の墓地に再び埋葬した事例や、家族の墓を改装した事例、身元不明のさまよえる戦死者の霊魂が集い、慰めや助けを受ける霊廟を建立した事例、死者を記憶するために記念建造物を建設する事例、霊魂をなだめようと新しい儀礼を考案する事例などがあった(Kwon 2006 を参照)。興味深いことに、国家は最終的には、大虐殺の犠牲者に弔意

を表する新しい式典を作り出し、たとえば、ミーライ村の犠牲者のために公式の記念行事がとり行われるようになった。しかし、そのような儀礼は、遺族の関心を引きつけなかった。そこでは、遺族が死者の霊魂を世話するために必要だと考える食べ物や供物を持ち込むことが、禁じられていたのである (Kwon 2006: 63)。クウォンが強調するように、大虐殺の犠牲者たちは「非業の死 (chết oan)」を強いられ、死後もその死がもたらす痛みと苦しみのなかにいる (Kwon 2006: 13)。数十年ものときを経て、残された者たちはようやく、個別的にも文化的にも適切な方法で、彼らの愛する者を安眠させることができた。そうして、「非業の死」により愛する者や自分たちにもたらされた苦痛を、少しでも和らげたのである。

最後に、公式の英雄の物語から疎外されており、公共空間において記念化されることのない、ある集団に触れるべきだろう。その集団とは、ベトナム共和国軍 (ARVN) の死者たちである。戦争中、数十万人の ARVN の兵士たちが戦闘のなかで命を落としたが、現在のところ、彼らに弔意を表する公の試みは存在しない。実際、彼らがかつて埋葬された古い墓地の多くは、その後閉鎖されている。そのなかには、遺体を取り除かれて別の建物が作られた場合もあった。このような人々が、革命に殉じた者と分類されることや、政権のために命を犠牲にした者と分類されることは、決してありえないのである。他

方で、ベトナムの中部や南部の人々のうち、北ベトナムの大義のために戦った者は、人民軍隊と民族解放戦線のいずれに所属した場合であっても、そうした分類を受けることができた。彼らのための墓地は、現在でも、ベトナムの中部や南部のいたるところで見いだされる。こうした扱いの差によって、国を統一する戦争に勝利したのがいずれの側であるかが、興味深くも示されている。現在の政権の考えからすれば、かつて敵の側の死者とみなされた者たちが公式に認知されることはなく、それゆえ、ARVN で軍務に就き、死んだ者の遺族は、自分たちが愛するその者に対して個人的な追悼儀式を行なうことしかできず、それで満足せざるをえないのである。

遺骨と収束する物語

ティンリエット社においては、死者を追想する儀式が発案された。それにより、革命に殉じた者の遺族が、遺体が不在であったとしても、戦死者の葬儀を行うことが可能になった。それは、残された者にとっては、個人的にも文化的にも意義のある解決策だったのである。しかしながら、その儀礼は、あくまで、ある1つの村で考案された解決策にすぎなかった。また、新たにとり行われたその儀礼をもってしても、愛する者の遺骨が手元にないために遺族が抱える苦悩は、完全には取り除かれなかった。そして、それと同様の苦悩を、ベトナム中で多くの遺族

24 戦死者とともに生きる

たちが抱えている。さらに、死の知らせを受けたときに遺族の多くが感じた苦痛や、その心に刻まれたトラウマは、彼らの愛する者の遺骨の所在が判明しないという事情により、その後何十年にもわたって強化され続けた。戦闘中に行方不明になった兵士の数は 30 万人以上になると推計されており、これら数十万人にも及ぶ兵士の遺族が、みな同じ痛みを背負っているのである。

この問題に対処するために、多くの興味深い解決策が講じられた。最も単純なレベルでは、戦争中に多くの兵士たちが、同じ部隊に所属する仲間の兵士と交わした約束がある。彼らは、自分たちが死んだ場合に遺体が失われるのではないかと危惧して、自分が死んだ日にちと場所を家族に伝えてくれるよう、仲間に依頼した。そうすることで、遺族が正確な日にちに追善供養の儀式をとり行うことができ、遺体もいつの日か遺族の元に戻されると考えられたのである。(ここで注意すべきなのは、とりわけ北ベトナムにおいては、2 度目の葬儀を行う慣わしがあることである。この 2 度目の葬儀では、遺体が掘り返され、清められて、場所を変えて埋葬され直される。それゆえ、遺体を掘り返すという考えは、文化的におかしなものではない。) しかし、不運なことに、このような情報が伝えられない事例が数十万に及んだ。多くの場合には、公式の死亡証明書に、兵士が死んだのは「南部」といった情報が漠然と記載されるだけだ

った。遺族にはただ、実際には何が起こったのかという問いだけが残され、彼らはその答えを求めて苦悶したのである。過去数十年のあいだに、戦死者に関する非公式の情報を伝えるネットワークが無数に登場した。ラジオやテレビ、新聞、それに、退役軍人中央委員会が発行する専門誌『ベトナム退役軍人 (Cựu Chiến Binh Việt Nam)』などを通じて、戦死者の遺体の場所を知る者と、特定の戦死者の情報を探す者とが、重要な情報を交換し合っている。なかには、抗仏戦争期にまでさかのぼった情報が扱われる事例も見られる。『ベトナム退役軍人』を開いてみると、そこには次のような情報がいくつも掲載されている。

革命に殉じた者、グエン・ズイ・トゥオン
出身地は、ゲアン省アインソン県チュオンスアン社。第 312 大隊ソンロー部隊に所属し、副分隊長を務める。1954 年にヴィンクア地域で展開された春の攻勢に参加し、6 月 21 日に殉死した。

この者と、その墓の場所に関する情報を求む。
革命に殉じた者の子供、グエン・フオン、ニャチャン市グエンティエントウアット通り 6 の 34 まで連絡を。

革命に殉じた者、グエン・ドゥック・レオ
1948 年に生まれる。場所は、ハイフォン市トゥイグエン県リエンケー社マイドン集落。

1966年9月に入隊し、1971年4月22日に殉死した。フーイエン省の後背地にあたる、ダックラック省チューボン山の732高地に遺体が埋葬されているとの情報がある。

この者と、その墓の場所に関する情報を求む。革命に殉じた者の父、グエン・ドゥック・マウまで連絡を。住所は、殉死者の出身地に同じ。

(War Veterans of Vietnam 1994: 25)

この2つの事例は、残された家族が所有する情報がどれほど漠然としており、そして個別であるかを示している。どちらの場合でも死亡日は家族に伝わっているが、最初の事例では、兵士が死んだ大まかな場所すら判明せず、葬られた場所もちろん不明である。一方、後者の事例では、家族は、兵士が葬られた場所についてやや正確な情報を入手しているが、依然としてその確証を必要としている。驚くべきことに、これらの遺族は、何十年ものあいだ、愛する者の遺体の場所を特定しうる確かな情報を得られないまま、日々の生活を営んできた。その年数は、前者の場合は40年、後者の場合は20年にも及んでいる。それでも、彼ら遺族たちは、公式に認められた情報交換網を利用しつつ、必要な情報を入手する望みを保っている。

多くの遺族が苦しみを感じていることは明白であり、それゆえ、彼らの愛する者の遺体を特定する斬新な方法が登場した。その1つが、既

存の墓地において遺体の有無を確認する新しい占いの儀式である。革命に殉じた者の墓地はベトナム中に設けられているが、それらの墓地には、葬られた兵士の身元が確認できない、「無名(vô danh)」とされる墓が数多く存在する。1990年代の中頃から、愛する者の遺体がどの墓地に葬られているかを知りえた遺族が、ある儀式を実践するようになった。彼らは、墓石のそばの地面に箸を垂直に突き刺し、そのうえに卵をのせようと試みる。もし卵が落ちれば、その墓には愛する者の遺体が埋葬されていないことになる。卵がうまく箸のうえにのると、それは、その墓に愛する者が眠る証しである。この占いの儀式が成功した事例は多く、1996年の4月には、雑誌『新しき世界(Thế Giới Mới)』に掲載された記事のなかで、その事象がいち早く紹介されている。この記事によると、1946年12月に抗仏戦争が勃発して以来、長きにわたって不明だった兵士の遺体の場所が、この占いの儀式を用いて判明したという(Xuân Cang and Lý Đăng Cao 1996: 8-11)。

卵を使ったこの占いの方法は、ある遺族たちにとっては有効であった。しかし、『ベトナム退役軍人』に掲載された事例が示していたように、遺体の場所についての正確な情報を欠く遺族たちもいた。彼らには、遺体の所在を知るために、また別の方法が必要となる。過去10年のあいだに現れた方法のうち、最も人気のあるものは、“ngoại cảm”として知られている。この言葉を

正確に訳すのは難しい。しかし、それを構成する2つの語に分けて見ていくと、この言葉の意味の理解が容易になる。一方の“ngoại”は、外部や外側という語義であり、他方の“cảm”は、感じる、あるいは、何かに感情的に影響されること、という語義である。それゆえ、“ngoại cảm”という言葉は、外部の何かに感化される能力を持つ、という意味となる。“ngoại cảm”を生業とする者は、ベトナムでは“nhà ngoại cảm”と呼ばれており、死者、とりわけ戦死者の霊魂と交信する能力を有するとされる。

“ngoại cảm”の霊能者という職種は、ベトナムにおいて最近になって登場したものであるが、彼ら以前にも、死者と交信する能力を持つ霊能者の系譜が、民間信仰のなかに長きに渡って存在してきたのであり、その系譜に彼らも連なっている。たとえば、ベトナムにおいては、祈祷師 (thầy cúng) や霊媒師 (ông đồng または bà đồng) が、そうした能力を持つとされてきた。祈祷師は、「招魂 (gọi hồn)」の儀式をとり仕切る。この儀式においては、生きている人間が亡くなった者の霊魂を呼び寄せて、その者と会話する。霊媒師の方は、霊魂を自らの身体に招き入れ、生きている者とその霊魂との対話を可能にする。“ngoại cảm”の霊能者は、それゆえ、従来の慣習を背景に登場した、新たな一変種なのであった。

この10年のあいだに、ベトナムでは、“ngoại cảm”の霊能者を自称する人々が数多く出現し

た。しかし、そのほとんどは、人々の弱みにつけこむ詐欺師であった。けれども、他方で、合法的に認められ、成功を収める“ngoại cảm”の霊能者も、少数ではあるが存在している。実際、2007年の7月には、「特別な能力を用いた、革命に殉じた者の遺骨探し」(Tìm Hài Cốt Liệt Sĩ Bằng Khả Năng Đặc Biệt)と名づけられた公式の式典がとり行われており、そこでは、1997年から2007年までの時期に革命に殉じた者の墓を探し当てた功により、10人の“ngoại cảm”の霊能者が表彰された。彼らは、革命に殉じた者や、革命に偉勲を立てたその他の者の墓を、この10年のあいだに1万5000以上見つけ出したとして、その功績を認められたのである。“ngoại cảm”の霊能者の1人であるグエン・ティ・グエンは、5000もの革命に殉じた者の遺体を探し当てたと公認された。また、ファム・ヴァン・ラップとチャン・ヴァン・ティアは、それぞれ1000以上の墓を見つけたとされた。他の受賞者のなかには、著名な“ngoại cảm”の霊能者である、ハノイ市在住のファン・ティ・ビック・ハンもいた。興味深いことに、表彰者のうちの3人はハノイ市から、3人はサイゴンから招待されており、ハイズオン省、タイグエン省、バージア・ヴァンタウ省、そしてディエンビエン省から呼ばれた者も、それぞれ1人ずついた (Nguyễn Bàng 2007)。現象の広がりはベトナム北部に止まらず、ベトナム全土から霊能者たちが来会したのである。

“nhà ngoại cảm” と呼ばれる霊能者たちに関する学術的な研究は、これまでほとんどなされていらない。そのため、彼らの活動を知るためには、人々の噂もしくはジャーナリズムの記事に頼らざるをえないが、彼らが特別な能力を身につけた経緯は、他の霊能者のそれと似通っているようである。“ngoại cảm” に関する科学研究を行う応用情報学工学科学連合会 (Liên Hiệp Khoa Học Công Nghệ Tin Học Ứng Dụng) の会長を務めるヴー・ティ・カインによれば、“ngoại cảm” の霊能者になる経緯は、主に 4 つに分けられる。第 1 に、ごくまれであるが、生まれつきその能力を備えている場合がある。第 2 に、「特別な能力」を基本的に有する人々に対して、墓を特定するための訓練を、科学者がほどこす場合がある。しかし、このような人々が実際に発揮する能力の如何については、いまだ研究中与され、その結果は公にされていない。第 3 に、格別に信仰心の厚い僧侶が、何年も厳しい修行を積んだ結果、意図せず能力を開化させる場合がある。しかし、信仰心の厚い僧侶であれば、俗世からは身を遠ざけようとするために、能力を身につけたその種の者たちの多くは、それを他の者に明かそうとしない。その例外が、式典において政府から表彰された 1 人でもある、ホーチミン市のグエン・ヴァン・ニャーである。興味深いことに、彼はその能力を用いて人助けを行うが、彼と接触する方法は、電話だけに限られている。そのため、彼が相談にのった人の

ほとんどは、一度も彼の顔を見たことがないのである。彼はまた、いかなる報酬の受け取りも拒否しているが、そうすることで、その能力を用いて物質的な利を得ていると非難されるのを避けているのだという (Công An Nhân Dân 2007)。

ベトナムにおける “ngoại cảm” の霊能者の多くは、トラウマとなるような出来事や、もしくは、命をおびやかされた出来事をきっかけとして、その能力を得ている。たとえば、グエン・ヴァン・チエウの場合であれば、ひどい感電事故に会い、その後に能力を身につけた。また、高熱やその他の病気を患った際に、臨死体験を経験した者もいる。(霊媒師の場合も、経緯は同様である。彼らのうちの多くは、深刻な病気を患うなどした後に、その能力を身につけている。) おそらく、最も有名な経緯は、現在はハノイに住むファン・ティ・ビック・ハンのものであろう。ハンは 1973 年に、ニンビン省イエンカイン県のカインホア社で生まれた。学問に秀でた彼女は、大学卒の学歴を持ち、現在はハノイにある経営管理大学 (Đại Học Quản Trị Kinh Doanh) に勤めている。1990 年に、彼女は友人とともに、大学入学試験を受けて、帰宅の途についていた。その帰り道で、2 人は野良犬に噛みつかれた。が、そのときは事態を深刻に受け止めず、2 人は家に戻ったという。しかし、およそ 1 カ月が過ぎたころ、友人は狂犬病を発症して倒れてしまい、その数日後には亡くなった。

ハンは友人の死にショックを受け、心配した家族はすぐに治療法を探し始めた。西洋医学のものであれ東洋医学のものであれ、様々な治療法が試された。しかし、ハンの容態は悪化する一途をたどり、家族でさえも、彼女の死が近いとあきらめるほどの状態に陥った。そこから彼女は生還したのである。回復した後のハンは、人の死期が分かる自分に気がついた。彼女は、村の2人の男性に、彼らが近く死を迎えると予言した。そして、2人はその通りにこの世を去ったという。当然のことながら、ハンは自分の能力をわずらわしく思ったが、その能力はやがて変容し、彼女は、死者との交信や、行方が分からぬ死者の墓の特定ができるようになった。現在の彼女は、最も成功を収めた“ngoại cảm”の霊能者の1人として認知されており、手がけた事案が有名になった場合も多い（Công An Nhân Dân 2007）。

今日のベトナムでは、多くの人々が“ngoại cảm”の活動に従事している。特筆に値すると思われるのは、それらの活動に対して、大きな支援が公式に与えられていることである。仮に現在が、革命の絶頂期にあったとするならば、政府は間違いなく、すべての“ngoại cảm”の活動を迷信異端であるとみなして、それらを固く法律で禁じたであろう。しかし現実には、公式の支援が強力に行なわれている。実際に、その活動は政府によって認可されており、また、それらについての研究に、政府の資金が投入され

てもいる。この問題に関する科学的研究は、前出の応用情報学工芸科学連合会を始め、「人間の潜在能力に関する研究センター」（Trung Tâm Nghiên Cứu Tiềm Năng Con Người）やその他の関連機関において、積極的に推進されている。研究の総合的な目標は、“ngoại cảm”の現象を科学的に解明することにあるとされている。

政府はなぜ、“ngoại cảm”という活動を認可しているのだろうか。その理由は、その活動が最終的に目指すところを考えると、理解が容易になる。“ngoại cảm”の霊能者たちは、これまで、1万5000をこえる革命に殉じた者の遺族を助け、彼らが戦場で死んだ愛する者の遺体を探し当てるのに貢献してきた。その活動を認めることは、ベトナム政府にとっては、直接的な利につながる。というのも、その認可は、民族と革命のために命を捧げた殉死者に対して、政府が関心を抱いている証しとなるからである。さらに政府は、結果として遺族にもたらされる利についても、十分に意識している。遺族たちにとっては、愛する者の遺体の所在が判明すれば、その者に対して適切に葬儀をとり行い、その靈魂に平安をもたらすことができる。そのとき、愛する者の死により引き起こされた凶事に、ようやく終わりがもたらされる。ある意味では、愛する者の遺体の所在を特定しえた遺族は、そのことにより、自分たちが愛する者の人生の最終章を書き上げて、その物語を締めくくるのである。そうして、計り知れぬほど大きな痛みと

悲しみが、ついに取り除かれる。2006年に制作された、“ngoại cảm”を紹介するBBCのドキュメンタリー作品が、そうした結末を求める遺族たちの姿を、はっきりと伝えてくれている。『サイキックベトナム』と題されたこの作品には、40年近くものあいだ、ある男性の遺体を探し求める遺族が登場する。彼らは、最後の手段として、著名な“ngoại cảm”の霊能者に相談を持ちかけた。ベトナムの南部に位置するバージア・ヴァンタウ省に住む、グエン・ティ・ミン・ギアである（彼女は政府から受賞された者の1人である）。やがて、ギアから家族のもとに吉報がもたらされた。彼女は遺体の場所を突き止めたのである。知らせを受けた後に、亡くなった男性の妻であった女性が、次のように述べている。

「心が安らぎました。ずっとずっと、このときを待ち望んでいたものですから。これで私は、幸せに死を迎えることができます」（Phua 2006）。こうした彼女の思いは、何千ものベトナムの遺族に共有されている。

結論

死とは、社会秩序に対する深刻な挑戦を意味し、それゆえ、それにふさわしい文化的意義を求めるものであると、社会学者たちは長らく認識してきた（Bloch and Parry 1982を参照）。機能主義の影響を受けた人類学者の主張に従うと、葬儀とはそうした対応の1つである。残された者たちは、人生の危機に直面するなか、葬儀の

場に寄り集い、人生や家族、そして共同体といった価値を再確認するのである。戦争における人間の死も、そうした一般的な現象の1つであるが、それには固有の特徴も備わっている。それらの死は、概して、暴力によって引き起こされたものであって、痛ましさを喚起する。さらに、故郷から離れた場所で、その死がもたらされる場合が多い。現実には、戦争により命を落とすとは、通常であれば無事に過ごせたはずの人生が、急に断たれることを意味する。また、人が戦争で殺された際に、その者たちの死は、文化的に「悪い死」とみなされるのが普通である。20世紀のベトナムで展開された戦争は、何百万もの「悪い死」を現実にもたらしたのだった。そうした事情により、戦争を生き延びた者たちは、深刻な問題に直面させられたのである。

ベトナムにおいては、戦争により何百万もの者たちが命を失ったが、本稿で示してきたように、それらの者たちの存在を単純化して語った場合には、彼らを取り巻く、興味深くも込み入った事情が、曖昧にされてしまう。戦死者たちを把握するあり方は、国家と人々のあいだで違いがあり、一方で国家は、非宗教的な存在として彼らを認識し、その認識の普及をはかった。人々の方とはといえば、戦死者の靈魂はその死後も存在し続けて、生き残った者の支えを必要としていると考えていた。とり行われた儀礼についても、その担い手が公式の立場にあるか大衆的な立場にあるかにより、異なった形式のもの

が生み出された。さらには、戦争による死者たち自身も、明確に異なった分類に分けられた。革命に殉じた者として扱われ、名声を保障される者もいれば、非戦闘員の戦争犠牲者とされる者もあり、ARVNの死者のように、現在も公式の汚名を着せられる者もいるのであった。亡くなった者に対するこうした分類は、戦争を生き残った者たちによる、死者たちへのその後の扱いにも、大きな影響を及ぼした。死者のなかには、その死後に公式に顕彰された者もいれば、逆に、公式には無視されるか忘却されるかした者たちもいた。あるいは、個人的な弔意や追悼の対象となるだけの者たちもいた。また、戦死者の遺体がすぐに遺族のもとに戻されて葬られた場合には、その遺族は、長年にわたる嘆きや悲しみを経験せずにすんだのに対して、遺体が何十年も失われていた場合や、未だその所在が判明しない場合には、戦死者の愛する家族は、その後苦悶の日々を送ることになった。

これらの重要な相違があるにもかかわらず、戦死者の扱いをめぐる個々の事例には、ある根深い共通した事情が見られた。ベトナムにおいては、戦争を生き延びたそれぞれの者たちが、戦争がもたらした人々の死を、何らかのかたちで、深刻な問題として受け止めざるをえなかったのである。国家にとって、人々が命を落とした現実が問題となったのは、その現実により、戦争による死の高貴さが損なわれ、政権や革命の正当性が掘り崩される可能性があったため

ある。家族にとっては、愛する者の靈魂に安らぎと慰めを与えるために、何をすればよいかという問題が生じた。社会学者であるロベール・エルツや、人類学者のアルノルド・ヴァン・ジエネップの考えを借りて、それらの問題を整理して考えるなら、生きていた者が戦争により命を落とすと、その者は、通常の社会関係の網の目から切り離されて、認知の定まらない禍々しい境域へと追いやられるのである (Hertz 1960, Van Gennep 1960 を参照)。そして、彼らが境域的な存在であり続け、生きている者の社会秩序に統合されないままにいる限りは、彼らによりもたらされる凶事に終わりはこない。そのため、ある者が戦争で亡くなった後に、残された者たちがとる行動は、戦死者を境域から引き戻して、社会秩序のなかに再統合する試みとして理解することができる。その目的を達成するために営まれる行為は、同じ様な形式をとる場合が多く、たとえば、遺体の所在を特定して儀礼をとり行い、社会的または個人的に望ましい場所にその遺体を埋葬する、といったことが行われた。しかし、ここで重要なのは、戦死者は社会秩序のそれぞれ別の領域に統合されるということである。国家であれば、民族共同体や民族の英雄といった領域に彼らを統合した。一方、残された家族たちは、クウォンが大虐殺の犠牲者に関する研究のなかで、説得力をもって示しているように、祖先たちからなる一族の共同体のなかへと彼らを統合したのであった。戦争を生き延び

た者たちは、そうした行為を積み重ねることによって、戦争中の死が惹起した凶事を終焉させたのである。

このような行為の積み重ねは、別の重要な帰結をもたらした。戦死者たちが物語のなかに統合され、彼らの物語が収束したのである。このことが明白だったのは、亡くなった兵士が、革命に殉じた者として分類されたときであった。そのとき、その者の人生の最期が英雄的な犠牲によって意味づけられ、その者の存在は、国家が作り出した英雄の物語のなかに統合されたのである。しかし、残された家族にとっては、愛する者が死んだ日にちと場所を特定し、さらに願わくは、その埋葬の日にちと場所を知ることが、正しく葬儀をとり行い、その者の靈魂に平安をもたらすために、ぜひとも必要であった。それらの情報が入手できない場合には、亡くな

った者の人生という物語がどのように幕を閉じたかが不明せず、その者は、彼ら遺族にとって、凶事を引き起こしかねない、統合されえぬ存在となってしまう。そして、残された者も死んだ者も、ともに苦しみ続けたのである。それらの情報が得られれば、そのときようやく、遺族は自分たちの愛する者の最期を知り、その者を安眠させる手はずを整えることができた。ベトナムにおいて、戦死者たちの扱われ方は実に多様で複雑である。しかし、彼ら戦死者たちへは、残された者たちの強い思いが向けられているのであった。生き残った者たちは、彼らの物語を収束させて、彼らに安らかな死後の生活を保障することを願っている。

参考文献：

- Baird, Jay W. 1992. *To Die for Germany: Heroes in the Nazi Pantheon*. Bloomington: Indiana University Press.
- Bloch, Maurice and Jonathan Parry. 1982. *Death and the Regeneration of Life*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bradley, Mark Philip. 2001. "Contests of Memory: Remembering and Forgetting War in the Contemporary Vietnamese Cinema." In Hue-Tam Ho-Tai, ed., *The Country of Memory: Remaking the Past in Late Socialist Vietnam*, pp. 196-226. Berkeley: University of California Press.
- Công An Nhân Dân. 2007. *Đi Tìm Lời Giải của những Nhà Ngoại Cảm Việt Nam* (Going to Find the Solutions of Vietnam's Nhà Ngoại Cảm). 3 November. http://tintuc.timnhanh.com/xa_hoi/20070311/35A5C0F3/
- Faust, Drew Gilpin. 2001. "The Civil War Soldier and the Art of Dying." *The Journal of Southern History*, Vol. 67, No. 1 (Feb), pp. 3-38.
- Hertz, Robert. 1960. "A Contribution to the Study of the Collective Representations of Death." In *Death and the Right Hand* (trans. R. and C. Needham). London: Cohen and West (エルツ、ロベール. 2001. 『右手の優越』吉田禎吾、内藤莞爾、板橋

32 戦死者とともに生きる

作美訳、筑摩書房)。

- Kapferer, Bruce. 1988. *Legends of People, Myths of State: Violence, Intolerance, and Political Culture in Sri Lanka and Australia*. Washington and London: Smithsonian Institution Press.
- Kwon, Heonik. 2006. *After the Massacre: Commemoration and Consolation in Ha My and My Lai*. Berkeley: University of California Press.
- Malamey, Shaun Kingsley. 2001. "'The Fatherland Remembers Your Sacrifice': Commemorating War Dead in North Vietnam." In Hue-Tam Ho-Tai, ed., *The Country of Memory: Remaking the Past in Late Socialist Vietnam*, pp. 46-76. Berkeley: University of California Press.
- . 2002. *Culture, Ritual and Revolution in Vietnam*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Mosse, George L. 1990. *Fallen Soldiers: Reshaping the Memory of the World Wars*. Oxford: Oxford University Press (モッセ、ジョージ・L. 2002. 『英霊—創られた世界大戦の記憶』宮武実知子訳、柏書房)。
- Nguyễn Báng. 2007. "Nhiều Nhà Ngoại Cầm Tim Mộ Liệt Sĩ Được Khen Thương" (Many Nhà Ngoại Cầm Who Have Found Revolutionary Martyr Graves Receive Commendations). July 23. *Tiền Phong Online*.
<http://www.tienphong.vn/Tianyon/Index.aspx?ArticleID=90529&ChannelID=46>
- Nguyễn Huy Phúc and Trần Huy Bá. 1979. *Đường Phố Hà Nội* (The Streets of Hanoi). Hanoi: Nhà Xuất Bản Hà Nội.
- Ninh Bình, Cultural Service. 1968. *Công Tác Xây Dựng Nếp Sống Mới, Con Người Mới và Gia Đình Tiên Tiến Chống Mỹ, Cứu Nước* (The Task of Building the New Ways, New Person and Progressive Family in the Struggle against the Americans to Rescue the Nation). Ninh Bình: Tỳ Văn Hóa Ninh Bình.
- Phua, Joe. 2006. "Communicating with Vietnam's War Dead." 17 May.
http://news.bbc.co.uk/2/hi/programmes/this_world/4989480.stm
- Pike, Douglas. 1986. *PAVN: People's Army of Vietnam*. New York: Da Capo Press.
- Tréglodé, Benoît de. 2001. *Héros et Révolution au Viet Nam: 1948-1964*. Paris: L'Harmattan.
- Tumarkin, Nina. 1994. *The Living and the Dead: The Rise and Fall of the Cult of World War II in Russia*. New York: Basic Books.
- Van Gennep, Arnold. 1960. *The Rites of Passage*. London: Routledge and Kegan Paul (ジェネップ、アルノルド・ヴァン。1999. 『通過儀礼』秋山さと子、彌永信美訳、新思泉社)。
- Vietnam, Institute of Philosophy. 1973. *Đảng Ta Bàn Về Đạo Đức* (Our Party Discusses Ethics). Hanoi: Ủy Ban Khoa Học Xã Hội Việt Nam.
- Vietnam, Ministry of Culture. 1979. *Những Văn Bản Về Việc Cưới, Việc Tang, Ngày Giỗ, Ngày Hội* (Documents on Weddings, Funerals, Death Anniversaries, and Public Festivals). Hanoi: Nhà Xuất Bản Văn Hóa.
- War Veterans of Vietnam (*Cựu Chiến Binh Việt Nam*). 1994. 10:46.
- Xuân Cang and Lý Đăng Cao. 1996. "Tìm Mộ Liệt Sĩ Bằng Phương Pháp Mới?" (Finding Revolutionary Martyr Grave with a New Method?). *Thế Giới Mới* (October) pp. 8-11.

(Shaun Kingsley Malamey・国際基督教大学)

(ますぶち あさこ・東京外国語大学大学院博士前期課程)